

春過て深きみどりにまじりなば

あたらし櫻も名をやけがさむ

昌貞

右の短冊の裏に

直清雅丈の金玉にむくい侍るとて。

あはれ身は草葉の露にたぐふとも

君がこと葉の花を思はゞ

昌貞

鑑の櫃の蓋の内に書記せり。

清き名を翹ならでも雲井まで揚んとぞおもふ武士の道

久敷籠居の比書林三箇屋といふもの、儒仙・武仙と題せ

し二帙を携て贈りければ、短冊に二首を題して給けり。

唐土の賢き道は今ぞみつあはれ及ばぬ世をや嘆かむ

對花述懷

竹田忠張へ贈ける短冊の歌。

住果む身とも思はぬ世の中にむかしは花を植てけるかな

池上櫻

里見南心へ贈ける短冊の歌。

櫻花色こそ水に沈むとも四方の嵐に香やは残らぬ

右歌一首を短冊に題し或人に贈りけるとて其裏に。

古歌 嵯峨の山御幸紀に芹川に千世の古道跡はありけり

一寸じに思へば今もあるものを絶にし道と思ひつるかな

題寺西氏獄中

十二衝中口意繁。忽然一夕到高門。

詩情日厚新金石。憶得月前雨露恩。

埋もれし谷の芝橋雪とけてあらはれ渡る今朝の春風

笹竹の一夜をだにと思ひしにいく曉の夢むすぶらん

忘れじな千里の外に隔つとも燕も來ぬる宿の夕暮

今や夢昔や夢と思へばやいづれをわきていふ由もがな

小ぐら山紅葉はうすき袂かな時雨ふり行秋をおもへば

月影のいたらでくらき寢屋の戸をあはれ絶すや照す燈

右は元祿六年癸酉葛巻昌興字は有禎蟄居の間雜詠也。

禮幹十九歳の時二月の比、此人縲絏の内に在て、志

を和歌に寄せけるを憐み思て書集め、巾箱の内に秘

し置きぬ。此比反故中より取出て可觀の中に載侍

るもの也。享保十四年二月十九日五十五歳。

可觀小説卷廿一

一、陽廣公百首詠歌。

横山城州副狀を附する本あり、別冊に有之。

君

春夏は六つの半に起初て暮て五つに寝たるぞよき

秋冬は五つ半に起きそめてくるれば四つの半にぞぬる

しばらくも月日の恩と天地のまことの道に離るべからず

天よりもうけし心を心にてあきらかにする人ぞ君たる

いにしへの聖の道を能く聞ておよばぬまでも身には行へ

我心正してこそは國人をあらたにすとはいふべかりけれ

訟を聞てたゞすは常の人なからぬやうに道をおこなへ

零れおつ軒端の萱もたゞすして木を削らぬは君の家かな

みなし子を恵む心の深き世はいかにか民も靡かざるべき

よき人をよきと見ながら用ひぬは是ぞまことの怠れる人

家にまづをしへしてこそ其後に法度に背くものは罰すれ

氣にあふもあはぬも諫まづ聞て捨る捨ぬは君のこゝろよ

主たる人軍の道を聞ならば七書のむねをふかく知るべし

上はかみ下は諸人にいたるまで無慾は家のつどく瑞相
おほく見てあしきを捨て慎みておこなふ時は悔ぞ少し
學なくてもしよき事をする人は燈火もたぬ闇の夜の道
百千の文の道をばよめるとも身におこなはぬ人は人かは
色このみ美食このみと酒好み利慾このみは家のめつぼう
君と臣心ひとつにもつならば其賞罰は正しかるべき
上下も道をおこなふ時にこそ神の恵も有とこそきけ

臣

主たる人あやまちあらば密にも筆にいはせて諫有べし
國ひとつ一つの城を持つ人は之を學びて道を知べし
朝起て先は主人に見えして扱其後は用をたすべし
主人より仰出しを能く聞きてもるゝ所の外を達せよ
主の事をほむるを聞て其人におくの心をゆるすべからず
人は只腹立がほになきやうにたしなみてこそ物は言よき
科もなく主人の道を遠のけば次第に物ぞ云にくゝなる
頭たるものは我身の依怙なくて素直なるべき人を取たて
勇むべき武士たる人は軍法を知るが上にも知たるぞよき
馬は只武士たるものの足なれば黙ながら恩の深さよ